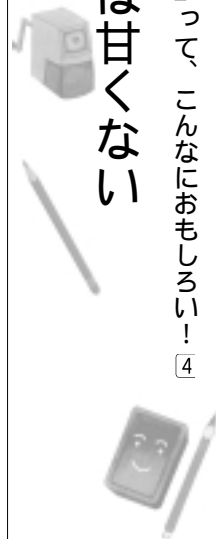


平仮名は甘くない

山梨大学教授 宮澤 正明
みやざわ まさあき

前回、書写的立場から文章中に使われる平仮名の役割と重要性について述べました。漢字に比べて簡単そうな平仮名ではありますが、決して甘くはないぞといった感想を持っていただけたのではないでしょうが。

そこで、小学校国語科書写の学習指導における、平仮名を整えて書くための要素とその内容、さらに指導のポイントを考えてみましょう。

平仮名の学習指導要素は大別すると 概形 筆順 筆使い 字形となります。今回は、概形と 筆順 にスポットを当ててみることにします。

概形

文字の外に張り出した主な点画の端を結んでアウトラインを引くと、□などのおおよその形で示すことができます。これを文字の概形（外形とも書きます）といいます。文字の概形は、同一文字であつても人によって異なるので、本来は個別的なものです。書写の学習に

おいては、整った字形による文字の概形を基準として固定的に扱います。

漢字や仮名は、長年毛筆で書き継がれてきました。その間に、文字をいかに機能的・合理的に、読みやすくそして美しく書くかといった工夫がなされ、その結果として文字それぞれに固有の形が形成されたのです。

例えば、「大」は「に」「国」は「□」（この場合は「国構え」がそのまま概形になります）に、「り」は縦長四角、「い」は横長四角といった具合です。これらの概形と異なる形に書くと読みにくくなるだけでなく、もし「り」と「い」が同じ□に書かれたら誤読され易くもなります。文字の概形は私たちの文字認識に深く関与しており、文字の識別に欠かせない重要な要素であるといつてことができます。このように、文字の概形指導は文字感覚を養つための基盤になるとも言えることから、書写指導においても初歩的段階で学習することが有効と考えます。

低学年における文字の概形指導では、算数で学習した図形と関係づけることはもとより、図形認識力の発達を考慮しながら、児童にとつて関心や興味の対象となる身の回りの物や動物の形などと関連づけると意欲的に学習することができず。また、「いろいろな形の箱（概形）に入る平仮名を選んで言葉にしてみよう」といったゲーム感覚の方法で楽しく学習すると、長期記憶も期待できます。

筆順（低学年では「書き順」と用いることが多い）

筆順は文字を書く上での絶対的要素です。毛筆で書き継がれてきた漢字や仮名の線には、毛筆特有の機能から終筆に「はね」や「払い」の筆使いが生じました。これらの多くは、次画や次字に移行するために生じたもので、筆順が異なれば無意味な筆使いとなります。さらに言えば、点画の構成順序としての筆順は、点画の長短、方向、接し方、組み立て方などの決定要因にもなっていることから、「筆順は文字の筆使いと字形を規定する」とも言えるのです。したがって、筆順は単に「点画を並べるための順序」というよりも、「筆使いを適切にし、点画を有機的に構築するための秩序」といふべきかもしれません。

平仮名の筆順は、画数が少ないだけに漢字に比べて難

誤った筆順

「せ」「な」「も」「ち」「ぶ」「ら」の筆順を示す図。数字は画数を表し、矢印は筆の動きを示す。

しいとはいえませんが、しかし、大学生の調査では、必ずしも完璧に書けているとは言えないのです。筆順の誤りがみられるものとして、上に示した「せ・な・も・や・よ・ら」があげられます。

「せ」を誤る場合は、字源の「世」の筆順も誤っているようです。「も」は、「モ」の筆順と混同しているようです。「な・や・よ・ら」の誤りは、「か・お・む」のように、短い画や点は最後に書くとの思い込みからと推測され、この場合は、筆順と字形との深い関係が一目瞭然（めいれつぜん）です。

低学年での平仮名の筆順指導は、色別で示したり数字で示したりするなど、さまざまな工夫によって行われていますが、筆順を一種の運動行為ととらえれば、身体運動によって習得することも効果的です。その意味で、視覚上の工夫とともに、手をかざして行う「空書（そらがき・クウシヨ）」も効果が大きいようです。（空書の方法や効果に関しては、いずれ詳しく述べたいと思います。）

いずれにしても、児童の筆順力は、指導者の筆順に対する高い意識と根気強い指導が反映すると言われます。

ある時、ベテランの先生からこんなことを伺いました。「板書しながら、『あれっ、この筆順でよかったかな？』こんな疑問を投げかけるだけで、いつでもどこでも児童の筆順意識は喚起できるんですよ」と。